重複を表す副詞“还”が生起するための言語環境

樋　口　幸　子

0. はじめに

重複[1]を表す副詞“还”に関し、これまで数多くの研究がなされた。しかしそれらは概ね各事例に対する機能上、語用上の断片的考察に留まり、その統一的、普遍的見解を提示したものとは言えないのではないだろうか。

重複を表す副詞は、“还”の他にも“再”、“又”等があるが、“还”独自の特性を総合的且つ明確に提示した指標たるべきものが存在しない現状では、各副詞の正しい選択は、学習者にとって習得し難い課題の一つとなっている。

そこで本稿は、如何なる条件下で“还”＋V形式が重複を表し生起可能となるのか、生起に至るための統一的な言語環境を検討してみたい。

1. 文法的機能の考察

1. 1“还”＋V形式が不成立となる事例

従来の研究によれば、“还”＋V形式が重複を表すためには、「重複動作が実現済みの時」、「数量補語」、「動結式」と共起することができない。

重複動作が実現済みの時

《现代汉语虚词散论》：“还”用在陈述过去的事实时不能表示重复。

(1) a ＊老王昨天去游泳，今天还去游了一次。〈沈〉（＊再）[2]

b ＊我昨天给小李打了个电话，今天上午还打了一个。（＊再）

c ＊父母去年去美国旅行，今年还去游了一次。（＊再）

数量補語　杨 1985：带时量补语和动量补语的动词前一般用“再”不用“还”。

(2) a ＊我们还休息一会儿，就出发。〈杨〉（再）

b ＊这种止咳药还吃两三次，才会有效果。（再）

c ＊我还学习两年，才能毕业。（再）

動結式《现代汉语虚词散论》:“还”的限制条件主要是它所修饰的动词性成分不能是一个带结果补语的“动结式”。…具有［+ 失去］语义特征的动词加上“了”[3]，如“烧了”、“坏了”等，不能受“还”的修饰。

(3) a ＊这件衣服要是还穿破了，你可别来找我。（再）《现》

b ＊这录像机要是还坏了，你就换一台吧。（再）《现》

c ＊参加了房屋保险，房子如果还烧了，就由保险公司赔偿损失。（再）《现》

1. 2 “还”と限界性

“还”＋V形式は上記三事例では生起しないが、そこにはある一定の共通点がある。「重複動作が実現済みの時」とは過去に既に終了した事象であり時間軸上に限界性[4]を有する事態である。また「数量補語」とは当該動作がある一定量であり限界性を持つ事態である。「動結式」は結果義が明らかに表出した事態であり当該動作が時間軸上に限界点を持つこととなる。これら三件の事例はそれぞれプラス限界性という点において共通点を持つ。では時間軸上に限界性を有する点が“还”＋V形式の生起を阻む要因となるのか、「限界性」に注目しつつ、他の事例でも分析してみよう。

2. 不成立から成立へ　事例その1――“还”と語気詞“呢”――

(1)’ a’ 老王昨天去游泳，今天还去游了一次呢。〈沈〉

b’ 我昨天给小李打了个电话，今天上午还打了一个呢。

c’ 父母去年去美国旅行，今年还去游了一次呢。

沈家煊2001に「不生起である (1) a の文末に語気詞“呢”を添加すると生起可能となる」との記載がある。(1)’ 各例の生起は、“呢”の如何なる機能に

よるものなのだろうか。

2. 1. “呢”の機能確認

2. 1. 1 先行研究

森2000：平叙文の“呢”は、ｉ持続の状態を表す“呢”、ii“还～呢”等ムードの“呢”の二種に大別できる。二者は「ある事柄を表現すると同時にそれと対立する事項を含みとして残し、そしてそれを話者が認めるムードを持つ」という共通性、統一的特徴がある。

ｉ　持続の状態を表す“呢”：“呢”自体が進行や持続のアスペクトを表すわけでなく、動作や状態が目下進行中であることを表しつつその含みとして早晩そうでなくなると話者が認める心的態度（ムード）を表現する。例えば“外边下着雨呢。”は、現在雨が降っている状態を示しつつ「いずれ止むのだ」と話者が認めるムードを表現する。

ii　“还～呢”等ムードの“呢”：現実事象と前提事象を関係づけし、相手に事実を確認させるムードをもつ。前提と現実間にズレがあれば訝りや咎めとなりズレが無ければ客観表現となる。例えば“都八点了，他还睡呢。”は、「発話時以前に起きているはずだ」という前提の中、八時なのに寝ている現実を捉え、前提と現実のズレ（起きるはずだがまだ起きてないという事実）を話者が認定するムードを持つ。

荒川2003：“呢”は現在の状態がどうであるのかを相手に示す助詞。

井上2002：“呢”は時間の流れに沿う変化のない「開いた形」の事象を示す。

2. 1. 2 先行研究を踏まえ“呢”の機能再考

森2000は、“呢”をｉ持続の状態ii ムードと二種に大別し、“呢”は共に「心的態度＝ムード」を表現していると分析した。従来“呢”は“提醒”や“出乎意外”等のムードを表すと言われてきたが、森2000は状態の持続を表現する“呢”ｉにも対立事項を認めるムードが含意されるとした。“呢”自身が進行や持続を表すアスペクトなのではなく、“呢”はあくまでもそれを認める心的態度（ムード）であるという。こうしてみると、“呢”は心的態度の表明、即ち

モダリティー、ある種の状態性を示すものであることになる。

そこで“呢”を［＋状態性］という観点から捉えれば、ｉ状態の持続を表す“呢”も、ⅱムードの“呢”も、共に状態性を表現し文に状態性を添加させる機能を持つといえよう。また、こうした“呢”の状態性は、荒川2003の通り、発話時における現時点での状態を表している。客観的な時間的・アスペクト的な状態性と、心的・主観的な状態性と、性質を異にしながらも、何れにせよ“呢”の機能は文の状態性に関わるものであるといえよう。

2．1．3　“呢”の付加による“还”＋Ｖ形式生起への道筋

“呢”を「時間軸上非限界的性質を持ち、現在の事象に関与し、状態性を持つ」と理解すれば、生起へ変化した経緯は以下のようにまとめられよう。

1. “呢”の線的で非限界性の特性は、原文の持つ時間軸上の限界性を、過去から現在に至る線的事態の中でのある一点として包括し、位置付けし直し、事象は線的なものへと変化した。限界→非限界
2. “呢”が状態性を付与。非状態文が状態文へと変化した。非状態→状態

例えばある事実「昨日も今日も泳いだ」があり、これは既に終結した動作であるため時間軸上に限界性を有する事態となり不生起であった（1）a。だが“呢”の付与で（1)’a’、限界性事実を今現在に至る時間軸の中で新たに位置付けし直すことになった。つまり今現在に至る過程（時間軸）の中でのある一部分として捉え直した。その結果「開いた形の事象」を表し且つ状態性を有する“呢”の特性が作用し、限界性を持つ閉鎖的事象が結果状態の持続として線的事態へと文の性質が変化した。“呢”は、限界性から非限界性へ、状態性の付与、この二点の変化をもたらし、言語環境は整い生起へ至った。

2．2　“还”の機能範囲

“呢”の付加で“还”＋ＶＰ形式は生起可能となった。これは“呢”の機能がある部分一点には限定されず文全体に関与しているため、文全体の性質を変化させた結果といえる。では次に、重複を表す時の“还”の機能範囲[5]について考えてみたい。

2. 2. 1 “重”や“再”との共起から

“还”は重複を表す時、同じく重複を表す“重”や“再”と共起する。このような事例に関し、原2002は「“重”が過去からの連続性を一旦断ち切りもう一度最初からやり直すことから、“还”自身は“重复”そのものを表すのではない」としている。では、“还”自身は“重复”でなく何を表すのか。

(4) a 那样的爱还会重来一次吗？（？那样的爱会再重来一次吗？）

b 这条道路还得重修一次。（这条道路得再重修一次。）

c 我还想把论文重改一次。（我想把论文再重改一次。）

(5) a 这么几个人哪儿够哇，还得再来几个。

b 那部电影很有意思，我还想再看一遍。

c 什么？听不懂了？那，我还可以再说一次。

“重”や“再”との共起事例には、構造上一定の傾向性が見られる。

・“重”／“再”は一般動詞に結合、“还”は外側に位置。

上記パターンを見ると、重複義中、動作性の表出そのものは“重”、“再”が担当し（「繰り返す」という実義は“重”、“再”が担当)、“还”は実義を担う動作性動詞の外側に位置し、述部動作を包括する如く更に上層レベルの機能を担っている。この構造上の明確な分業は、“还”の機能が述語動詞の更に外側のレベルに関与し、重複義に限定されないことを指し示すものである。

2. 2. 2 疑問代詞との共起から

杨1985：動詞の前に原因を問う疑問代詞がくるときは“还”が選択される。

(6) a 那么危险，你怎么还让他们去？（＊再）

b 那两个人为什么还去那样危险的地方？（＊再）

c 你怎么还找我？（＊再）

“还”が重複を表す疑問文では「どうであるか」といった事態の有り様が問題にされ、これは「どれか」「どこか」等一点に絞り込んだ点的な問題ではない。従って“还”の機能は、動作が起こったその事態全体、当該動作発生時の場面全体に関与していると考えられる。“还”は重複義一点を担うために機能するのでなく、述語動詞の更に外側の、事態全体、場面全体に関与することに

なる。“重”、“再”との共起、また疑問代詞との共起、この二件の事例分析を総合すると、“还”の機能管轄範囲は、重複動作一点に限定されず、重複動作を含む場面全体、事態全体であると言って構わないだろう。

3. 不生起から生起へ　事例その２――“还”と能願動詞――

(2)’ a’ 我们还要休息一会儿，才能出发。

b’ 这种止咳药还得吃两三次，才会有效果。

c’ 我还要学习两年，才能毕业。

(2) では数量補語と“还”＋V形式が共起しないことを確認した。だがそこに能願動詞を付加すると生起可能へと変化する。如何なる理由であろうか。

3. 1　能願動詞の機能確認

能願動詞は、重ね型にならない、“了”、“着”、“过”等アスペクト助詞の修飾を受けない、命令文になれない等、動作性が弱く一般動詞と階層の異なる静的存在である。蒋・金 1997 は、能願動詞の表すのはある種の「状態性」であり、可能性であるとした。また中国語の状態動詞を最もまとまった形で扱ったといわれるヤホントフ 1957 の中でも、能願動詞はその一つに分類される[6]。一方、木村 1997 は、状態とは時間軸上で展開せず均質な状況を表す静的な線状を呈するとした。これらの先行研究から、能願動詞とは「実義動作を表現する一般動詞とは階層の異なる、プラス状態性且つ線的な存在」であるといえよう。実義動詞と能願動詞の関係は、まず実義動作を担う動的な動詞が基礎段階にあり、能願動詞はその上層に位置し実義動作に関わる事態の可能性や状態性を表現しているといえる。これらを踏まえ、能願動詞が“还”＋V形式生起にどう関与したかは次の様に整理出来よう。

1. 数量詞の影響下で限界性のある事象は、線状を呈する能願動詞に上層から覆い込まれることで限界性を内部に包括しつつ、事象全体としては非限界性、線的事態となった。　限界→非限界

2. 能願動詞が状態性を付与した。　　非状態→状態

不都合であった原文の生起条件は、線的且つ状態性を有することで改善され生起に至ったが、ここの線は今までの線と性質が異なる。それは「能願動詞の状態性は線状を呈するが、時間軸で展開されるものではない」（木村 1997）からである。生起へ導く線的である言語環境は、時間軸上の線の他、心理作用や可能性など時間軸以外で捉える線があることをここで確認しておこう。（4. 2で後述。）ここまでの考察の共通点は、「線的且つ状態性を有する」の二点だが、これは次の二事例からも更に裏付けできよう。

3. 2　“还”と“在”の関係、“还”と“有”の関係から

蒋・金 1997：“还”的延续意义与表示“持续”的“在”的相容。

（一）他还在图书馆　　动词　状態の持続（＊再）

（二）他还在教室里学习　介词　存在する位置（→状態性あり）（? 再）[7]

（三）他还在打针吃药　　副词　状態の持続（＊再）

“还”の継続性と“在”の持続性とが重なるのは確かだが、考察を補充すれば、持続とは森 2000 が「未完了の状態」とした様、事態が続いていく有様であり、ある種の状態である。つまり“在”と“还”との共起にも持続の持つ状態性が関連していると言える。更に杨 1985 が指摘した“动词‘有’后带时量补语，其前面可用‘还’”も、“有”の線的で状態性を有する性質が数量詞の限界性に対処する補助成分として生起へと導いているといえよう。

(7) a 还有三天，就过年了。〈杨〉（? 再）

b 本期招生定额是十五名，还有三名，就满员了。（? 再）

c 还有两个月，我们就要毕业了。（? 再）

1. 2で、“还”＋V形式の生起を阻む要因の可能性に「限界性」を挙げたが、一連の分析から“还”は何れも限界性を有する事態では生起しなかった。“还”＋V形式生起の言語環境及び“还”の機能範囲は以下の通りである。

1)“还”が生起する言語環境とは非限界性の線的事態である。

2)“还”が生起する言語環境は状態性を有する。

3)“还”の機能範囲は重複動作を含めた事態総てである。

4．語用面の考察

“还”の生起環境を機能上から分析すると「線的で状態性を有する」言語環境であることが分った。しかし“还”は実際の運用では動詞と直結する事が多く、その時生起の適応条件を表層上から判断出来ない。また従来“还”は継続性を持つと指摘されてきたが、重複とは本来一度終結した動作の繰り返しであり点的事象であるのに対し、継続とは線的事象であり、両者は解釈によれば異なる意味概念に属す。なぜ“还”は異なる意味概念を両方合わせ持つことになるのか。“还”の何らかの特徴が重複と継続に統一性をもたらすのだろうか。そこで4章は、実際の語用例から“还”がどの様な言語背景の下で選択発話されるのかを認知的に分析し、“还”の機能をより一層明確化し、機能面での考察結果との関連性を探り、そこに統一的見解を補充したい。

4．1　一般動詞直結型

“还”が直接一般動詞と結合し、“呢”や能願動詞などの補助成分が無い時、“还”＋V形式を成立させる条件が線的事態なのか、それとも他の要因によるものかどうか表層上からは判断することができない。

(8) a 今天还吃这个菜呀。(＊再)

b 明天还做吗？(？再)

c 这个问题今天解决不了，那我明天还来，后天还来，一直到解决为止。

《对》(？再)(？再)

4．2　“还”の「線」とは？—時間軸上に限定されない—

木村 1997：動作とは時間軸上に動的な線状を呈するもの。

(図1)　動的 ←→ 静的

変化＞動作＞状態＞属性　　(木村 1997：191 頁参考)

点状‖　　線状　　(網掛けは筆者による加筆)

用例 (8) で「各動詞がそれ自体状態性を内在し線状を成すため生起する」のかどうか、その証明は文脈の中で捉えなければ判断は難しい。そこで逆に、動作の側に予め前提条件を課した場合はどうなるのかを実験してみる。動作自体が状態性を有し線状を呈することが明白な場合、表層上他の補足成分が欠如しても線的事態として“还”＋V形式が生起するのかを確認してみる。

(9) “今天还下雨。”「今日もまた雨降りだ。」(“下雨”：線的／＋状態性)

(9) で「“下雨”という動作[8] は線的且つ状態性を有する。従って“还”＋V形式を生起させる言語環境（線的／＋状態性）を満たし自足し、他の要素を欠いても重複を表し機能する」と分析することは妥当なのであろうか。

ところが (9) は母語話者の語感によれば「今現在は雨が降っていない」とした発話状況を喚起させるそうである。例えば雨降りの翌朝「今日もまた雨」という天気予報をAが見て、まだ見ていないBに「(今は降っていないが) 今日もまた降るよ。」と伝える状況下等で発話されるという。ならば、(9) の“下雨”というイベントは断続的であり時間軸上での物理的継続性は無いことになる。つまり発話時現在の時間軸では肝心の動作行為自体は一本の継続する線とならない。だが実際上記の言語環境で重複を表し“还”が選択されている。

(図2)　一昨日　昨日　今日・・・・・・・・

時間軸：→

“下雨”の表す線的事態：→雨→雨→晴れ (→雨→)・・断続的な線

そうなると“下雨”の重複、“还”の表す線的事態は、時間軸上で捉えるものと限らないことになる。“还”はこれまで継続を表すと指摘されてきたが、この継続性とは時間軸上での継続性に限るものでないことがここで確認できた。

では、物理的線以外どのような継続線であるのだろうかと考えると、既に3.1で「“还”の言語環境は線的事態であるがこの『線』が物理的な線以外、心理

作用を含む線がある」という考察結果が出されており、ならば (9) 等、時間軸上での物理的線が繋がらない事態での生起は、その線が心理的継続線であるという可能性を示すものであるといえよう。つまり、“下雨”は発話者の認識の中に於いて一本の継続線として存在している。

“还”の表現する線的事態とは、決して動作行為だけに限定されない。発話者の心理的な継続性を表す認知上の線的事態があり、「重複」を動作行為に焦点を絞り観察すれば物理的線は繋がらずとも、話者の心理作用、認知作用に分析対象を拡大すれば、“还”は「線的事態」を表現することとなる。

図3)　　一昨日　昨日　今日・・・・・・・・・

時間軸：　→

“下雨”の表す線的事態：　→ 雨 → 雨 →　晴れ（→雨→）　・・断続的な線

話者の認知：　→　途切れない継続線

ところで、2. 2. 2で、“还”の管轄範囲が述語動詞に限定されず事態総てであることを考察したが、上記の分析とこれは符合する。それは“还”の継続性は決して物理的な動作行為（重複動作）一点のみを表現するものでないという点である。物理的には継続性のない点的事態でも、話者がそれを一本の連なる連続行為と認識すれば認知上の継続線が繋がる。“还”の機能は人の認知作用も表現し、決して動作性のみを表現するためだけのものでない。

整理しよう。“还”の線的事態とは、物理的な線的事態の他それを眺める話者の認知的な線的事態があり、二本のレベルの異なる線的事態を表現する。

“还”の機能範囲・・・動作を包括した事態全体（動作一点でない）

“还”の継続性・・・・物理的継続線・認知的継続線（動作一点でない）

4. 3 “再”との比較から見た“还”の認知的継続性

前項に続き、“还”の線的事態の特性を見ていく。実際の運用例の中で“再”と比較しつつ、“还”を選択発話する際の話者の認知上の差異を考えてみる。

(10)　要是你还说谎，我就再也不信任你了。　「また嘘をつくなら

(10)’要是你再说谎，我就再也不信任你了。　　もう君を信じないから」

(10) の“还”は動詞に直結し機能上アスペクト的補助成分も無く、状態性を有するか線状を為すか表層上から判断できない。だが二文は共に重複を表し生起する。“说谎”という動作の重複事態に変わりは無いが、母語話者によれば、二文は発話状況、発話背景が異なるという。そこで重複動作の発生状況と両文の発話時の話者の認知的差異を以下に整理してみた。

時間軸上観察：(重複以前の物理的状況)

(10) (10)’：“还说谎”、“再说谎”共に重複動作発生以前に「ウソをつく」という前回動作があった。前回動作発生時と重複動作発生時には時間的隔たりがあり、時間軸上の物理的な継続線はない。

語用上観察：(重複以前の認知的状況)

(10)：重複を表すが認知的継続性を含意。度々嘘をつく相手に「またも～」と過去からの連続性・継続性を含意した時 (10) の選択が自然。もう一点、認知上過去に発生した前回動作との関連の中での再発生を表現。話者は認識上、過去に発生した動作との関わりを踏まえ、(10) を選択。

(10)’：これまで凡そ人を騙すことなど無かった人が嘘をつき、それに対し「もう一度嘘をついたら駄目だよ」等、新たな次回動作の発生、動作の再発生を表現。動作性が中心であり、認知的連続性、継続性は含意せず。過去との関わりでなく、動作の再発生を重点的に意識した表現。

発話者の意図を比較すれば、“还”文の重複は、過去からの継続性、過去に発生した前回動作との認知的な関連性が含意される点に特徴が見られる。対して“再”で表す重複は、新たに重複されるというその動作性に表現ポイントがある。簡単に言えば、“还”は一点一点（前回動作・重複動作）の点的事態も表すが、それを視野を広げ継続として線的事態に捉えることも出来る。だがいずれにせよ、認識上、前回動作を意識し、前回動作とのかかわりの中で発話選択されたものである。他方“再”は、あくまでも新たな点的事態、重複動作を表すことに機能の重点がある。認知上前回動作との関わりは薄く、新たに発生する重複事態の表現が中心となる。

4．4　両副詞の主眼

引き続き“再”との比較から“还”の機能を見ていく。今度は異なる文中での両副詞を観察し、重複を表現する際の両副詞の主眼を更に明確化したい。

(11) A：今年夏天，你还去夏威夷度假吗？

「今年の夏、またハワイに行くの？」

B：不去了。等养好了伤，明年再去。

「行かない事にしたよ。傷が治ってから、来年また行くさ。」〈徐〉

Bは「行かないことにした」と動作の継続性が断絶する状況下で、イベント再発生として“再”を選択している。継続性の途絶える事態で“再”が選択されるのは「行かなくなった→また行く」と動作の新たな再発生にこそ主眼が置かれているからといえよう。では、Aの“还”での重複、その主眼は何なのか。「また行く」を表現する質的差異及び主眼を以下に整理した。

“再”：実義的な重複を表現。動作の再発生、動作性に表現の主眼がある。

“还”：事態全体を、過去との関連の中で捉えるため、動作の重複のみに文の主眼があるのでない。認知上、過去の事態との関連性を意識した上での重複動作の発生、線的事態を表現し、場面全体の表現に主眼がある。

4．5　重複と継続

重複と継続では時間軸上での概念が異なるが、なぜ“还”は異なる意味概念を跨ぐことになるのだろう。重複と継続の関係、差異を考え、4章の冒頭で提示した疑問に結論を出したい。

(12) 如果她真的还爱我的话，我可以跟她结婚。「私を本当にまだ愛していのならば～」

(12)’ 如果她真的再爱我的话，我可以跟她结婚。「私を本当にまた愛するならば～」

上記二例に関し、“爱”に関する発話者の認識の違いから比較してみよう。

(12) 話者が認識している彼女から私への愛情には継続性が見てとれる。

(12)’「彼女がまた（もう一度）私を愛すなら・・・」、愛するという行為が

新たにまた繰り返されること、行為の再発生を意味する。もし二人の間に恋愛感情の空白期間があり、新たに行為が再発生される場合には (12)' が選択される。

(12) (12)' の“爱”という行為自体は変わらない。だが、対訳は“再”文が「また愛する」、“还”文は「まだ愛している」となる。“还”は重複も表すが、なぜ重複と継続の両方に対応するのか。

“还”が表現するのは線的事態である。物理的に継続性が無い時、その背景に生起の補助となる発話者の心理的継続性を持つことで一本の線的事態を表す。認知面に拡大し観察すれば、“还”は点的な動詞、線的な動詞の両方に対応することが分る。従って、“还”＋V形式が表現するのは述部の性質により、継続性が欠ける時は重複を表し「また」の訳が与えられ、継続性を持つ述部では継続を表し「まだ」の訳語が与えられるようになる。言語により事象の切り取り方が異なるため、前事態から新事態を一連の線的事態と捉える“还”に於いては、日本語では「また」或いは「まだ」と異なっても、何れも“还”で対応すると考えられる。だが、何れにせよ“还”は線的事態に対応する副詞であり、対訳に関わらず状態性を持つ線的事態を表現する。重複を表す“还”＋V形式が生起する言語環境は以下に集約できよう。

1) “还”が生起する言語環境とは非限界性を有する線的事態である。
この線的事態は時間軸上で捉える客観的線の他、認知的主観的線がある。
2) “还”が生起する言語環境は状態性を有する。
3) “还”の機能範囲は重複動作に限定されず、事態総てである。

5. おわりに

“还”の生起には、状態性を有する線的事態が必要であり、その線的事態は、実際に時間軸上で捉えられる客観的な線の他、認知的、主観的線が存在することも分った。おそらく前回動作との関連性に於ける心理的な継続性、状態性が、“还”の語用上の豊かな機能へと広がる基盤となるものと思われるが、詳細な

研究は今後の課題としたい。また、そもそも動詞“还”は「あるべきところへ戻る」という語義がある[9)]。“还”が持つ心理的な線的事態、継続性が、前回動作の方へ戻るベクトルを持ち、これが“还”の特徴として他の副詞と“还”の機能を枝分かれさせる要因であるなら、通時的研究を進めることでその変化過程の中から、“还”の語義特性を一層明確に解明させるヒントが見つかるかも知れない。今後の課題としたい。

【注】

1) 本稿では重複を広義で捉える。重複と継続は一繋がりの概念とし両者をともに重複と呼ぶ。(沈家煊 2001：“增量”和“持续”是两个相通的概念，状态的持续往往伴随数量或程度的增加，两者有时难以分开。)
また、関連動作や重複対象が異なる「追加」は考察対照から除外する。

2) 例文末尾のカッコ内には便宜上置き換えられる“再”を記した。“再”はその多くの機能が“还”と重なり合い、互換性の観点から比較対象として最適と考えられるからである。①闹到元宵节祥子没法再忍下去了。②天黑了，不再坐了。③我用手触了一触老杨，劝他不要再说下去。など、“再”が重複義以外、継続義を有する点は史锡尧 1996 を参照されたい。

3) ここでの“了”は結果補語寄りの“了”である。

4) ここでの限界性とは、事象自体に内的終了限界を含むということである。

5) 沈 2001 の注によれば Liu,F.-H.2000 The scalar particle hai in Chinese（CLAO29）の論として「“老王去了学校，老张还去了”が成立出来ず“老王去了学校，老张还去了呢”が成立するのは、“还”文の焦点が主語に無く“还”の管轄範囲が丸ごとの命題であり、それに従い自ずと主語もそれに含まれるから。」という記載がある。何れにせよ“还”の機能が一点には集中しない点に関し、沈 2001、Liu2000、本稿は共通する見解を持つ。

6) 荒川清秀 1980「中国語の状態動詞」『愛知大学文学論叢』より引用。

7) “他先在图书馆学习，然后再在教室里学习。”の様な場合“再”が使える。

8) “下雨”は持続段階をもつ連続過程であり、以下に従い「動作」に分類する。(木

村 1997　187 頁）「動詞には自主動詞と非自主動詞がある。自主的運動行為と持続段階を有する非自主的運動を一括して『動作』と呼び、瞬間性を有する反動事態を『変化』と呼ぶ。」

9）動詞“还”huán は「帰る、戻る」等の意味を持つ。今後通時的研究を通じ本稿の考察との関連性を探りたい。（ちなみに“还”が hái の音で確認できるのは、明代以降である。）

【主要参照文献】

相原茂 1992「“* 明天再来吗？”の非文法性」『現代中国語文法研究論集』大東文化大学語学教育研究所

荒川清秀 1980「中国語の状態動詞」『愛知大学文学論叢』

荒川清秀 2003『一歩すすんだ中国語文法』大修館書店

原由起子 2002「“还”と時間副詞」『中国語における修飾の様相』東方書店

井上優・生越直樹・木村英樹 2002「テンス・アスペクトの比較対照」シリーズ言語科学『対照言語学』東京大学出版社

蒋琪　金立鑫 1997〈“再”与“还”重复义的比较研究〉《中国语文》第三期

河上誓作 1996『認知言語学の基礎』研究社出版

木村英樹 1997〈‘变化’和‘动作’〉『橋本萬太郎記念中国語学論集』内山書店

木村英樹 2003「東アジアのカテゴリー化と文法化に関する対照研究」公開研究会レジュメ

陆俭明・马真 1999〈关与表重复的副词“又”“还”“再”〉《现代汉语虚词散论》语文出版社

马希文　1985〈跟副词“再”有关的几个句式〉《中国语文》第二期

森宏子 2000「平叙文における“呢”の機能」『中国語学』247

沈家煊 2001〈跟副词“还”有关的两个句式〉《中国语文》第六期

史锡尧 1996〈“再”语义分析〉《汉语学习》第二期

杨淑璋 1985〈副词“还”和“再”的区别〉《语言教育与研究》第三期

【用例引用文献】（文末に特に記載のないものは筆者の作例である。）

〈沈〉沈家煊 2001　〈徐〉徐迎新 2000　〈杨〉杨淑璋 1985

《现》陆俭明　马真 1999《现代汉语虚词散论》语文出版社

（ひぐち　さちこ　お茶の水女子大学大学院博士後期課程）